

推敲と構成と

——芭蕉の手法に学ぶもの——

芭蕉の作品を少しずつ、ていねいに読んでみると、まことに芭蕉は努力の人であった、という感を深くする。一字一句もおろそかにしない表現上のくふう、「腸を割く」ほどのきびしい推敲をとおして、珠王のごとき作品が生みだされていることがわかる。

しかし、芭蕉のナマのことは（初案）は、まことに平凡である。時には、よくもこんなつまらない句を芭蕉は作ったものだ、と思うようなものがある。しかし、それは決して非難さるべきことではないであろう。われわれはむしろ、そこに、ありのままの芭蕉を見、芭蕉の句のつまらなさを理解しなければならぬのだ。

たとえば、「山路きて何やらゆかし 葦草」の名吟も、初案は「何とはなしに何やらゆかし 葦草」という稚拙な表現であったし、「閑かさや岩にしみ入る 蟬の声」も、はじめは「山寺や石にしみつく 蟬の声」という平凡な句であった。

芭蕉の偉大さは、こうしたつまらない句をも捨てることなく、そのモチーフを生かして、推敲に推敲をかさね、みごとに作品に仕上げたところにあると思う。われわれが芭蕉に学ぶべきは、このひたむきな推敲の態度であろう。芭蕉は決して、生まれながらの「俳聖」ではなかった。なまみの芭蕉には、人間としての苦しみや

愁いばかりが多かったはずである。

二

教科書には、芭蕉の名句と称するおさまりの作品がいくつか載っている。それらは、いずれも磨きあげられた文学作品ばかりであって、ちよつとやさつとでは、生徒が真似のできるようなものではない。彼らは、高嶺の花を見せつけられて、俳句というものはこんなにもムズカシイものであるかということ的印象づけられるだけで、授業は終わる。これでは、教師がどんなに蘊蓄を傾け、徹に入り細にわたる説明を加えても、学習効果はうすいであろう。もっと作者の人間的な悩みや苦心のさまを問題として投げかけ、なまなましい芭蕉の息吹きを感じとらせるような方法が工夫されてしかるべきである。さきあげた立石寺の蟬の句にしても、

（初案） 山寺や石にしみつく 蟬の声

（再案） さびしさや岩にしみ込む 蟬の声

（定型） 閑かさや岩にしみ入る 蟬の声

と並べてみて、はじめて表現のおもしろみもわかり、作品の解釈も深まるうというものである。初五「山寺や」という場所的説明から一転して、「さびしさや」という心情表現となり、さらに「閑かさ

や」という落ちついた心境の表現に定着していく過程を、的確におさえる必要がある。「閑かさや」だけをいくら追求しても、この句の深さはびつたりと感じられないであろう。「山寺や」の外的素材、あるいは「さびしさや」の内的心情と対比して、ゆれ動く芭蕉の表現意識を把握すべきである。

「石」と「岩」の相違によってことばの重量感を比較し、さらに「しみつく」↓「しみ込む」↓「しみ入る」の微妙な表現の相違にまで注目するとき、より効果的に芭蕉の心に迫ることができるのではないだろうか。

### 三

芭蕉の俳文も、きわめて味わい深いものである。「幻住庵記」とか「柴門の辞」とかいった堂々たる名文ばかりでなく、三行ないし五行の短い句文にも、芭蕉の心づかいがよくあらわされているものが多い。こんにち知られている芭蕉の俳文はおよそ一四二種（校本芭蕉全集による）、そのうちの大部分は旅の体験にもとづいて書かれたものであって、『野ざらし紀行』・『笈の小文』・『おくのほそ道』などの紀行文と密接な関係を有している。

芭蕉は、旅の途中で、人々の所望に応じて、短い句文（いわゆる俳文）をたくさん書きのこしたが、旅のあとでも、回想により気に入った句文を書いて他人に与えることがあったらしい。また、紀行文の礎稿として、短い句文を何度も書きなおしたらしい形跡もある。このようにして、たとえば『おくのほそ道』の「しのぶ文字摺」の条に相当する俳文は十一種類、「笠島」の条に相当する俳文は十種類もの異文が知られている。ここでも芭蕉の推敲の態度を知ることができるが、次にとりあげてみたいのは文章構成の手法である。

芭蕉は、紀行文の執筆にあたって、まず、句をふくむ短文（いわ

ゆる俳文）を幾つも作り、それらをつなぎあわせて全体的な構成をはかったと考えられる。その間に、もちろん部分的な改稿が何度もおこなわれ、草稿的なものが、ばらばらの「俳文」としてこんにちに伝えられた、とも考えられる。部分部分を整えて全体に及ぶ、いわば煉瓦やブロックを一つずつ積み重ねるような、手堅い手法である。『おくのほそ道』は、こうした手法で書かれたのであろう。ただし、紀行文執筆の過程にあっては、せつかく書いた名文でも、全体の調和を乱すような部分があれば、惜しげなく削除することもあった。『笈の小文』のごときは、いったん書きあげてみたものの、どうしても意に満たないため、未定稿として全面的に放置してしまった（拙稿「芭蕉における事実と虚構」、文学語学・第四九号）。このあたりが凡人の及びがたいところであって、われわれならば、せつかく苦心した文章だから何とか生かして使おうと、これに執着して、かえって筆が進まなくなることがありがちである。

しかし、こうした高次元の文章構成の意識を、芭蕉とて、はじめから持っていたわけではない。『野ざらし紀行』の段階では、まだ「地の文」についての明確な意識がなく、「句の前書」でいどにか考えていなかったようである。芭蕉はつねに、こうした未熟な、たどたどしいところから出発して、さまざま模索を重ねた末に、ひとつの完成した姿を示してくれる。その模索の過程が、芭蕉ほど具体的にわかる作家は、他にあまり例がないように思われる。

### 四

さきごろ、第七回、広島大学国語教育学会（昭和43年8月11・12日）で、作文教育についての研究討議がおこなわれたが、そこでとりあげられた問題のうち、推敲について、構想について、短作文から長作文へ、等々のいくつかが、すでに芭蕉が身をもって実践し、一つの典型を示してくれているように思えて、興味ぶかく感じたことであつた。（昭四三・八・三〇稿）

— 広島大学助手 —